

裏表

小林信彦

忠臣蔵



裏表

林信彦



新潮社

うらおもてちゆうしんぐら
裏表忠臣蔵

定価 一一〇〇円



印刷 一九八八年一月一五日

発行 一九八八年一月二〇日

著者 小林信彦 (こばやし のぶひこ)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

102 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話 業務部 03 (266) 五一一 編集部 (266) 五四一一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

©Nobuhiko Kobayashi 1988, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、(一)面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-331813-9 C0093

裏表忠臣蔵 ● 目次

序章	最初の事件	9
第一章	小さな町の大きな衝撃	21
第二章	吉良荘	34
第三章	商人失格	47
第四章	鏡の国	60
第五章	東と西	74
第六章	ビッグ・シティ、ブライト・ライツ	88
第七章	存在の耐えられない軽さ	101

第八章	江戸の向う側	114
第九章	追いつめられて	127
第十章	揺れる男	140
第十一章	幕間狂言	153
第十二章	虐殺 またはスラップスティック	166
第十三章	事件の始末	179
終章	ことの次第	192
作者ノート		205

装画
装幀

河村要助
平野甲賀

裏表忠臣蔵

グレゴール・ザムザに起つたことが吉良上野介義央にも起つた。ザムザの変身譚を信じられぬ人は、この物語もまた信じられないだろう。

序章 最初の事件

……陽ざしが明る過ぎる。昨夜までの緊張は消え、頭の中がうつろになっていた。大廊下は巨大で非現実的なものとなり、あたたかさも陰影も感じられなかった。和様の浜松に千鳥のとぶ絵がつづいている。廊下をゆく人々がからくりで動く操り人形のように見えた。明るさのせいで眼が痛い。眼に差し込むようなこの光は何なのだろうか。彼はわずかによろけ、やさしい薄暗がりの方に寄った。

梶川与惣兵衛頼照よそべえよりてるがきいたのは、「この間の遺恨、覚えたるか」という叫びだった。打合せのために松ノ大廊下まできたのだから、高家筆頭の吉良上野介義央きりかみのかみぎさと浅野内匠頭長矩あさののうぢのちかたけがそこにいるのは当然である。しかしながら、浅野が小刀を抜いて、吉良に斬りつけているのは当然ではない。

梶川頼照は本能的に行動した。浅野にとびつき、抱きとめた。浅野は動けなくなった。

六十歳をこえた梶川も、次にどうしたらよいのかわからない。とんでもないことが起ってしまったと思うだけである。

吉良上野介は額を斬られ、背中にも傷を負っている。高家衆の品川豊前守やお坊主が吉良を抱えて、高家の詰所に運んだ。

梶川に押さえ込まれた浅野は蒼白になって叫びつづけている。

この〈叫び〉について、梶川の日記（梶川氏筆記）と目付・多門伝八郎の手記（後年記したもの）とでは若干の相違がある。信用度においてまさる梶川日記によれば、次のようなことを叫んでいたという。

——上野介には、このあいだ中の意趣があるので、殿中とは申せ、今日のこと、かたがた恐れ入ったことではありますが、ぜひに及ばず、打果したのです。

多門伝八郎らは、梶川から浅野を受けとり、蘇鉄ノ間に控えさせた。〈事件〉とは、これだけのことである。

江戸城での刃傷事件は、浅野内匠頭が最初ではない。家光の時代にもあり、綱吉が將軍になってからは、一六八四年に、若年寄・稲葉石見守正休が大老・堀田筑前守正俊を廊下で刺殺した事件がある。稲葉はただちに堀田正俊の弟らによって斬り殺されている。

これは幕府内部の事件であって、〈浅野事件〉よりもはるかに大きい。稲葉は君側の奸を

切るといふ趣旨の遺書を懷中にいれていたが、事件の真相はわからない。殿中で刀の鯉口を切った稻葉正休の家は断絶になっている。家光の時代に刀を抜いた豊島家も断絶していた。

殿中で刀を抜けば、切腹、断絶というルールを浅野内匠頭は知り抜いていたはずであるが、〈浅野事件〉の困ったところは、内匠頭が刃傷の理由を語っていないことにある。一般には浅野と吉良の喧嘩と考えられているが、これは後年の伝説・芝居から逆算された解釈であって、その場にいた梶川の日記には、〈争いの原因〉についての記述はまったくない。

ひとことではいえば、これは十七年前の堀田正俊刺殺事件よりも小さな事件である。それが異常にふくれあがり、共同幻想を形づくってゆくのはなぜか？

事件の発生は、一七〇一年（元禄十四年）三月十四日午前である。

その時刻に五代將軍綱吉は行水をつかっていた。勅使を迎えるための作法である。

事件の噂はたちまち城中にひろまっていた。困惑する老中たちの中で冷静だったのは〈仕切りの出羽〉こと柳沢出羽守保明（のちの美濃守吉保）で、勅使たちへの返答の式の間を白書院から黒書院に変更した。白書院のそばで流血沙汰があったのだから、適切な処置である。勅使御馳走役は浅野に代えて、戸田能登守忠真（かんだまね）に決めた。

これらすべてを綱吉に報告できる者は、側用人（わきづきり）の柳沢保明しかいなかった。〈生類憐みの令〉発令に代表される偏執狂的な傾向のある綱吉に、大廊下での事件を報告すればどうい

ことになるか、老中たちはわかつていた。

綱吉が服装をととのえてから、柳沢保明は事件を手短かに報告した。

予想通り、綱吉は激怒した。勅使を迎えるに際して、人もあろうに、当の御馳走役が刀を抜くとは狂気の沙汰である。朝廷への配慮、將軍としての面目を考えれば、この怒りは当然なのだ。綱吉らしい勇み足があった。事件を老中たちに任せずに、自分で裁決を下したのだ。浅野を芝の田村右京大夫の藩邸に預けるという決定である。奏者番（殿中における礼式に関することを司る役）の中から田村右京大夫がえらばれ、老中の口から任命された。

目付衆による浅野の事情聴取は一度おこなわれたが、裁決はあまりにも早かった。慎重論をとなえる老中もいたが、ともあれ、浅野は正午前後に田村家からの駕籠に乗っている。平河門を出たところで、駕籠に綱がかけられた。

だが、綱吉だけを責めるわけにはいかない。勅使たちはすでに登城しており、すぐ近くで「言語二絶スル」騒ぎを知っていた。裁決のあと、すぐに勅答の儀式をおこなわねばならないのだから、綱吉も忙しい。

問題があるとすれば、午後に、老中たちを集めておこなわれた第二の裁決の打合せであろう。

まだ平靜でない綱吉は、即日、切腹を申し渡す、と言いだした。老中・稻葉丹後守は乱心ではないでしょうかと猶予を願った。秋元但馬守、土屋相模守も同様だった。この事実は松

ノ大廊下でのトラブルが〈喧嘩〉ではなかったことを示している。〈乱心〉（狂気）とは便利
な言葉のようだが、十一日、すなわち勅使が江戸に着く日、精神的疲労から浅野はつかえを
起して、藩医の寺井玄溪が薬をのませていた。

つかえとは癩しかの同義語とされているが、〈胸にさしこみの起る病氣〉である。胃痛、心筋
梗塞からヒステリーまでを含むのが癩だが、〈強いストレス状態〉へヒステリー性神経症
〈神経生理的な不安定さ〉といった可能性が考えられる。弟の浅野大学が後年、兄を評して
〈短氣でおこりっぽい〉と語った事実と符合するし、〈癩癩持ち〉という世評とも一致する。

話は前後するが、浅野は田村邸で遺言を口述する少しまえに、挨拶人あいさつじんに対して、「自分は
不肖のうまれつきで、その上に持病の瘡つかえがあり、行動の抑制が利かなくなる……」と述べて
おり、病氣を自覚している。——とすれば、刀を抜いたのは〈発作的凶行〉であり、〈乱心〉
といえるかどうか。ともあれ、二月四日に御馳走役を任命されてから一月以上の〈昼夜御精
力被_レ尽候故〉（落合与左衛門）、心労に持病が加わって自制心を失ったと考えるのが妥当であ
ろう。

もっとも、老中たちにしても、心から浅野に同情的だったかどうかは疑問である。最終的
には切腹になるにしろ、再度の事情聴取やらなにやら、途中の段どりがなければ不自然であ
り、不穏当にみえる。吉良の話もきいてみなければ、まずいだろう。その結果、浅野が悪い
と決れば、切腹もやむをえまい。

こうした空気を察した綱吉は、さっさと月番老中を呼び、みずから浅野の切腹を命じた。

綱吉は問題の多い人ではあるが、政治を、大名・旗本政策から経済・財政重視にきりかえたある種の天才である。天才ではあるが、わがままで、好き嫌いが激しい。だから、裁決申し渡しは、浅野に〈切腹〉を命じ、一方、吉良はといえば、

へ上野介儀、御場所を弁へ、手向致さず、神妙の至、……随分大切に保養致す可く候。

……

と、その態度を賞賛している。

綱吉としては、怒りのおさまらぬ気分を、もろに出した裁決で、それが先ゆき、人々に、自分に、また吉良に、どう影響するかは考えていない。

（何なんだ、これは……）

詰所で横になったままの吉良義央はひとりごちた。

大目付・仙石伯耆守が「時節を弁え、場所を慎みたる段、神妙」という綱吉の言葉を伝えるにきた。

「えらい！ あんたはえらい！」

伯耆守は奇声を発して、

「刀に手をかけなかったのが、えらい。神妙、大人のふるまい、と評判ですぞ」